

命、守れるか、

小さな二棟

永井路子

(作家)

さして大きくない私学の、それも小さな二棟の取壊しが、これほどマスコミの注目を浴びようとは……。かつて戦時中に学んだ東京女子大学の寮舎(東

寮)と体育館のことなのだが。

寮は当時としては珍しい一人一部屋の造りで東西二棟、二階建各約百室。私のいた西寮はすでに無く、東寮も寮として使われなくなっている。一室は三畳そこそこの狭さだが、創立者新渡戸稲造学長の「女の子には一人で思い、祈る場所が必要だ」という意図で造られた部屋には、さまざまな思い出がある。

プライベートは保たれ、秘密の手紙を読んだり書いたり、好き勝手に読んだ本の中には国禁の書もあったが、誰にも知られなかった。時には底知れない孤独にさいなまれもしたが、一方では狭い部屋に十人くらい目白押しに並んで楽しくおしゃべりもした。

が、いま旧寮生の一人として取壊しを惜しむのは、その思い出のためではない。東京女子大学の創立は一九一八年、女子の大学は認められず、女性の選挙権

もなかった女性差別の時代、あ

えて当時の男子の旧制高校・大学と等しい高等学部・大学部を創り、英・国・数の専門学校課程を併設した「大学」を出発させたのが新渡戸学長であった。声高に差別撤廃を叫ぶのではなく、まず事実を積みあげていく。寮の一人部屋も、思い、祈ることで女性に自立を自覚めさせたのだとすれば、古びた狭い部屋も、そのまま日本女性史の貴重なモノキュメントではないか。

寮にはパーラーがあつて、毎夕礼拝が行われた。そこで初めてキリスト教に触れ、自分の人生はここから始まった、という卒業生も多い。新渡戸学長の祈りへの誘いも、確実に実を結んでいる。

東寮の上級生には瀬戸内晴美(寂聴)さんがいた。王朝継紙や古典研究に活躍される近藤富枝さんも瀬戸内さんと同級で、

お二人とも演劇に凝っていた。

その一つ「修禪寺物語」が上演されたのは、今取壊されようとしている体育館で、一部に二階のある優雅な造りである。新渡戸学長は、将来世界に翔(た)くレーディーとしてのエチケットからダンスまでを、ここで身につかせようとしたのだった。

二棟が取壊されると知って、卒業生の間から保存運動が起った。これと時を同じうしてこれらの建物の設計者、A・レーモンドを再評価する動きが沸きあがり、「東女レーモンドの会(略称)」が発足したとき、私も発起人の一人に加わった。

レーモンドはチェコ生れのアメリカ人。帝国ホテルを設計したライトの弟子として来日、新渡戸学長・常務理事のA・K・ライシャワー氏(駐日大使だった故E・O・ライシャワー氏の父君)の委嘱をうけて東女の全

建築九棟を設計、うち七棟はすでに国指定の有形文化財なのだ

が、なぜか東寮・体育館は除外されている。

から保存は可能という証言が得られた。このシンポジウムによると、レーモンドは故郷のチェコのチエコキユビズムの技法を知悉し

階建の新校舎を造るのだという。東寮は老朽化し、保存に耐えないからということだったが、「東女レーモンドの会」の開いたシンポジウムで、専門家

(チエコではこの技法による建造物は世界遺産になっている)、その技法は鮮かに東寮の中で駆使されているという。東寮は稀有な文化遺産でもあるのだ。

建築家、建築学会、建築史学

会からも、保存要望書が続々と大学に届けられているし、多くのマスコミも二棟の保存に注目しはじめた。「東女レーモンドの会」は一万一千名以上の保存要望の署名を集めたし、保存と新校舎を両立させる提案もいろいろ行っている。私も文化庁の意見を訊ねたところ、取壊しは「残念」という手紙を頂いた(取壊しに賛成でないというギリギリの表明であらう)。

さきに西寮が取壊されたときの学長隅谷三喜男氏も、東寮は残すべきだという御意向だったとか、その言葉がどこで握り潰されたのか。これを大学が継承していれば、私たちは何を言う必要もないのだが……。

私たちは大学との話合いの折、「まず祈りから始めましょう」と提案した。戦いでなく真の話合いを。建築関係者の要望

書についての見解も聞きたい。取壊しか保存か。新校舎による経済効率か歴史か、話合いはこれからなのに、大学は八月から東寮取壊しを始めるとか。折も折、レーモンドを評価する世界巡回展が、九月十五日から神奈川近代美術館・鎌倉で開催されるというのに……。

世界のレーモンド支持者の前で匕首を突きつけられている東寮の姿はあまりにも無慚すぎる。文化財の保存に多少とも関わってきた者として最後に一言。ホンモノは「残さないでよかった」ことは一度もなく、「残してよかった」か「残せばよかった」しかない。